

The 28th Princeton Japanese Pedagogy Forum

Language Education and Just Society

What Can We Learn from Cases from Bilingual and Heritage Language Education?

ことばの教育が創る社会

バイリンガル教育・継承語教育の事例がことばの教育に投げかけるもの

Pre-recorded Presentation

Antonio Marcos Bueno da Silva Junior (The Japan Foundation in São Paulo)

Teaching as a facilitator through interculturality and decoloniality perspectives (English)

Teaching as a facilitator is a concept that has been discussed for a while in Brazil's Japanese Language Education field. This concept aims to create a space in the classroom where teachers encourage and guide learners in their process of learning a new language. To do so as teachers, we should take a step back and think about which questions and which kind of activities we could do to stimulate an environment where learners can share their thoughts and learn a new language collectively. In this present work, we intend to discuss and (re)think teaching as a facilitator relating this perspective through interculturality and decoloniality thoughts. By thinking through interculturality and decoloniality lenses we aim to open our minds about the interaction between learners and teachers. Interculturality guides us to a deeper comprehension about culture as a social factor that is shaping and readjusting constantly. Decoloniality, on the other hand, opens our minds to understand the social structures that are given to us, helping us to make new thoughts to act with in new perspectives and to deconstruct mechanisms of control that are given to us in society. As teachers we believe that these concepts make us think more carefully about our students needs and about their social backgrounds, leading us to think about when, why, where and what for we are teaching. The discussion will be made by sharing our experience of elaborating and teaching a class about culture in a Japanese online course held by the Japan Foundation in São Paulo/Brazil, bringing our struggles, new thoughts and questions about our teaching methodology and the interaction with the students in an online class.

Makiko Fukuda (University of Texas at San Antonio), Naofumi Tatsumi (Brown University), Yumi Takamiya (University of Alabama at Birmingham), Kazumi Matsumoto (Ball State University), & Shogo Sakurai (Nagoya University of Foreign Studies)

現代の多様化した日本の価値観をめぐる考察—多文化社会を反映した日本文化コースでの教材開発をめざして—(日本語)

米国の高等教育機関で日本文化コースを開講するための教材作成において、次のような懸念点が考えられる。「日本文化」や「日本社会」を扱っている教科書においては種類が少なく、内包されているトピックは日本の表層的な文化に偏ったものや著者の研究分野に主軸をおいたものが大半を占めている。そして、既存の教科書は現代の多様化した日本社会の文化を活写しているのかという問題もある。そこで、本研究では文化を包括的に支えている深層的文化の「価値観」に着目し、グローバル化した現代の日本社会の構成員である日本人、及び日本在住者の価値観がどのように変遷しているかを調査し、そこで得られた結果を教材として生かせないかと考えた。

本研究には、米国で日本文化を教えた経験のある5名の日本語教師が協働で携わった。まず、英語で書かれた日本文化に関する過去10年分の書籍を精査し、日本の価値観として挙げられているキーワードを抽出した。その後、それらのキーワードが価値観としてどれだけ重要なかを、日本在住者を対象にパイロット調査とし、精選されたものを元にアンケートを作成し実施した。その結果、現代の日本を表す価値観、例えば同性愛結婚や多様性の尊重において、世代差、地域差、男女差等が見られるものと見られないものに分かれることがわかった。これらは不可逆的にグローバル化する今日の日本の多様な社会を反映した結果と考えられる。他方、伝統的な日本の価値観が根強く残る傾向も観察された。現場で日本語を教えている教師の価値観は、多様化する日本社会の現代の価値観を実際に反映しているものなのか、アンケート結果と照らし合わせながら考察していきたい。

Higashihira Fukumi (The University of Tokyo)

パラオにおける戦後の日本語教育と国際協力(日本語)

本研究では、独立行政法人国際協力機構（以降、JICA と略。）からパラオに派遣された元日本語教育隊員やその他パラオにおける日本語教育関係者にインタビュー調査を行い、パラオの日本語教育の現状（派遣当時）と日本語教育の協力ニーズを明らかにする。パラオには多くの日系人が住んでおり、パラオ語には日本語起源の借用語も数多くある。これらは第一次世界大戦後にパラオが日本の委任統治領になったことに端を発しており、日本政府は現地に南洋庁を設置し、多くの人々を移住させ、インフラ整備を行った。移住者には国語教育を、パラオ人には同化政策として日本語教育を行った。戦後は1994年に独立するまで米国の信託統治下に置かれ、戦前の日本語教育が英語教育となり、大きく様相が変わっていく。しかし、パラオ在住の日系人も多く、毎年日本人観光客も多く訪れ、パラオと日本は良好な関係を築いている。その背景にはパラオが小島嶼開発途上国であることからJICAによる国際協力の貢献が大きいと考えられるが、『JICA 海外協力隊日本語教育ガイド』によると、1965年から2020年までJICAがパラオへ派遣した日本語教育隊員はわずか3名であり、大洋州では最も派遣人数が少ない。さらに、パラオでは日本語話者や日本語学習者は減少している。戦争の贖罪から戦後のパラオで日本語教育が普及しなかったことは当然考えられるが、一方で現地では日本語教育を求める声もあり、その背景には何があるのか。パラオの戦前の日本語教育や日本語起源のパラオ語の先行研究は多くみられるものの、戦後の継承語教育についてはあまり語られていない。よって、本研究を通して、パラオにおける日本語教育のあり方を再考する。

Rina Hikita (Senshu University)

ネパール人日本語学習者の誤用分析—中国人学習者との比較— (日本語)

ネパール人日本語学習者は漢字圏の学習者と比べて、会話能力が突出して高くなると言われることがあるが、それはどこに起因しているのか。ネパール人日本語学習者の知覚と生成に見られる誤用を探ることによって、四技能のうちの「聞く」と「話す」について、その特徴を明らかにしたい。調査協力者は、日本在住のネパール人日本語学習者（以下、JN）、ネパール在住のネパール人日本語学習者（以下、NN）と日本在住の中国人日本語学習者（以下、JC）である。それぞれに対面で事前インタビュー、知覚実験、生成実験を行った。調査で対象とした刺激語は、長音・促音・拗音を含む語と含まない語でミニマルペアになっている語とミニマルペアになっていないダミーの全33語であり、いずれも有意味語である。1文に1語の刺激語が含まれており、刺激語がミニマルペアの場合、1文の中で刺激語のみが異なるようにした。知覚実験では刺激語の書き取り及び選択肢での解答、生成実験では文の読み上げによる方法をとった。その後、知覚実験で解答された刺激語と生成実験で文の一部として読み上げられた刺激語を分析した。

その結果、書き取りの正答率はJNが、選択肢と読み上げはJCの正答率が最も高かった。ミニマルペア間での誤りでは、JCは満遍なく誤りが見られたが、JN・NNは促音に関する誤りが少なかったことから、JN・NNは促音の有無の知覚および生成が苦手ではないことがわかった。また、JN・NNの知覚実験には拗音の直音化、全母音が他の母音に交替する現象が、生成実験には直音の拗音化等が見られた。したがって「聞く」・「話す」についてネパール語の影響を受けていると言えよう。

Nami Kroska (Independent)

認知文化言語学から見た「日本のよそ行き言葉—声のトーンとポライトネス」(日本語)

21 世紀の日本が少しずつ変わってきているのは事実であるが、以前、多和田葉子氏がその著書「エクソフォニー：母語の外へ出る旅」に残しているように、私もよく成田国際空港に降りた瞬間に他の国とは違う違和感を覚えたものだ。それは、空港内で聞こえてくるアナウンスの声やチケットカウンターなどで聞こえてくる声。日本ではごく当たり前の様に、営業用の声と普段の声があり、バイト言葉やアニメなどで使われる役割語があり、(無意識に?) いくつもの声の調子やトーンを使い分けている。それは、まるで昔からある、普段着(ウチ)とよそ行きの服(ソト/ウチ)とを分ける日本人の心に通じている。おもてなしの国。ソト/ヨソの人を意識している日本人。相手を思いやる精神が基本であり、それが文化にも繋がっている。話し方も然りである。そこで、今回の発表では、この日本社会の基本であるウチ・ソトに加え、ヨソの概念にも焦点を当て、ソト・ヨソに対する声のトーンとポライトネスの関係に着目し、日本人の「よそ行き言葉」について考えてみたいと思う。

筆者は 2015 年にコロンビア大学大学院での修士論文で牧野誠一教授の主査の元、"Yosoyuki-Kotoba: Japanese tonal pitch change in voice, usage and awareness"を研究した。その際、2014 年の 10 月から 2015 年 3 月までの 6 か月の間、「よそ行き言葉に関する意識調査」を実施した。このアンケートには日本に住む日本人約 350 名と当時日本に在住、又は、それまでに日本に在住経験のある外国人約 150 人が回答した。このアンケートの結果を振り返りながら、日本人の「声から発するポライトネス」と「外国人から見た日本人」との温度差を比較する。

Nagisa Moritoki (University of Ljubljana)

日本語学習者は名詞修飾節をどのように読み誤るか—非漢字圏の中級から上級学習者を対象とした読解プロセスの分析—(日本語)

本論文は、日本語学習者が名詞修飾節をどのように読み誤るかについて、学習者の困難点を分析・考察する。

中級以降の学習者が目にすると考えられるブログや雑誌、学術論文には、名詞修飾節が多く使われている。日本語教育では、名詞修飾節は初級後半に導入されることが多く、このときは「内の関係」「外の関係」の二種類の名詞修飾節を取り扱う教材が多い。しかしそれ以降、名詞修飾節が文や文章における構文論的特徴や語用論的特徴を取り上げる教科書や教材は非常に限られている。一方、日本語教育における名詞修飾節については、学習者の産出に着目した研究はあるものの、理解のプロセスについて論じられた研究は山中(1999)、Kanno(2007)、守時(2020)など数が少ない。したがって、初級後半以降特別な指導を受ていないと考えられる状況で学習者が読解時にどのように名詞修飾節を理解しているか、そのプロセスに注目して分析することにした。

分析に用いたのは「日本語非母語話者の読解コーパス」(国立国語研究所)である。この調査では、学習者に文章を読みながら考えた内容を母語で発話してもらおうという方法を用いている。分析は、N2 以上の非漢字圏学習者を対象とした。読解時における困難点を分析すると、(a)語の意味理解、(b)文構造のとらえ方に関するものが多く観察された。さらに、(a)語の意味理解では、被修飾名詞の語構成や修飾部述部の語構成に関する困難が、(b)文構造のとらえ方に関しては、修飾部述部と被修飾名詞の関係、修飾部の開始部、また名詞修飾節と主文の関係に関する困難が見られた。この分析を通して、中級から上級にかけての学習者に、文章において名詞修飾節を理解する指導が必要であることを提言する。

Erika Sako (Kyoto Seika University) & Nobuyuki Yamauchi (Doshisha University)

Use of Visual Images in Remote Classes as a Teaching Method: Findings from Exchange Classes between Japanese Students and Elementary- to Beginner-Level Foreign Japanese Learners (English)

This paper aims at reporting on the findings and achievements in exchange classes between two groups: seven Japanese language partners and seven elementary-to-beginner level foreign learners of Japanese, and proposing a new teaching method in which visual images could be utilized in remote classes. First,

we suggest the use of a “Class Handout,” using a free online whiteboard application called Google Jamboard, to share visual images and simultaneously engage in interactive communication. Next, we compare two types of video teleconferencing software, Zoom and SpatialChat. Both of these provide internet-based video-telephony and chatting services. Zoom is a popular tool for distance education. SpatialChat has also come to be known as a small, group video chat for in-person virtual meetings, since its release at the onset of the COVID-19 pandemic in 2020. It is important to note that SpatialChat has a function that allows participants to choose from between a feature that allows talking to only the people placed near one’s icon on the screen and the megaphone feature that allows talking to everyone; making it different from the function of Zoom. The exchange class was held eight times from November 2021 to January 2022. The first three lessons were conducted using SpatialChat, and the last five using Zoom, including a lesson with other guest teachers. Through the learners’ comments, we analyze the advantages and disadvantages of both the software programs. Finally, we discuss how visual images can address and compensate for the difficulties of verbal communication in the target interaction classes. We conclude that an analysis of teaching methods that make use of visual images could be of considerable educational significance, especially since they may be applicable to remote classes.

Yuko Sawabe (Miyagi Gakuin Women's University), Makiko Uemura (Kanda University of International studies), & Masaomi Nakagawa (Josai International University)

継承言語教育の視点から見た絵本読み聞かせプロジェクトの意義 (日本語)

本発表は、2021年5月から12月にかけて日本、中国、韓国の5大学の学生が協働で実施した「絵本読み聞かせプロジェクト」の意義を継承言語教育の観点から考察するものである。プロジェクトでは、日本語専攻、韓国語専攻、中国語専攻、日本語教育専攻の学生たち合計64名が、出版社から許可を得た5冊の絵本を専攻する言語へと翻訳し、さらに、やさしい日本語版へとリライトを行ったうえで、それぞれの言語でオンラインの読み聞かせ会のプログラムを企画し7回シリーズで開催した。参加した子どもたちは日本、韓国、中国、ベトナムから延べ66名で、年齢は2歳から13歳までであり、その大部分は親の母語が日本語、韓国語、中国語、ベトナム語のいずれかで、外国につながるのある子どもたちであった。参加者アンケートの結果、どの会も9割を超える保護者が読み聞かせ会を「良かった」と回答しており、家庭の中でしか継承言語を使用できない環境やコロナ禍で親の母国に行くこともできない状況の下、さまざまな国の大学生と絵本を介して交流できる機会が貴重であるというコメントが多く見られた。さらに、読み聞かせ会では一冊の絵本をさまざまな言語のバリエーションで読み聞かせたが、子どもたちにとっては自分につながるのある母語や継承語だけでなく、全く知らない外国語にも関心を持つきっかけになったというコメントも複数見られた。本発表では、保護者に対する読み聞かせ会のアンケートと個別インタビューのデータを量的、質的に分析し、保護者が読み聞かせ会に対して感じる意義と今後の課題を明らかにする。

Asako Takakura (University of California Los Angeles)

多言語習得の無限の可能性—日本語・英語同時性バイリンガル習得者の自伝を一例にして— (日本語)

本発表は日本語・英語同時性バイリンガル習得者が **Critical Autobiography (CAB)** の執筆を通して自己の言語習得を振り返り、両言語に対する自己肯定感を形成した過程を実例とともに紹介する。さらにその自伝を次世代のバイリンガル習得過程にある小中学生が読み、将来への道標を探る取組の実践例を提示する。発表者は2002年から2011年まで北米の州立大学の継承日本語クラスで学生のCABを収集した。アメリカの移民の子供が家族の母語と異なる言語で教育を受け始めると言語に対する自信や出身国の文化や家族への肯定感を失うことがある (Lee, 2008, Zhou 2009)。自己肯定感や自分のルーツへの誇りを保持するためにCABを通して自分と向き合うことの重要性はバイリンガル教育や移民教育の場で議論されてきた (Brisk, 2010)。本発表で紹介するCABプロジェクトでは言語習得、家族とのつながり、現在の自分、10年後の自分という4つの柱を軸に参加者が日本語で5~7ページの自伝を書いた。抜粋した7作品を同じような環境で二言語を習得しているアメリカ在住の小中学生22名に「読み教材」として提供し、共感する点や自分との相違点などを

話し合った。CAB の作品には、教育者や保護者が二言語を同時に習得した経験がないため、二言語同時使用に否定的になり、その概念が同時性バイリンガル習得者の自己肯定感に悪影響を及ぼした事例があった。本発表が、両言語の使用を認めずバイリンガル話者を強制的に一言語環境に置くことによって言語能力を伸ばそうとする従来の教育の在り方を再考する機会となることを期待する。

Chikako Takehara (Harvard University) & Tomoko Graham (Harvard University)

中上級日本語におけるストーリーテリングの応用—会話力を磨く練習—(日本語)

一般的に中上級レベルの日本語クラスでは、読み物を扱った教材が多く使用され、文語的な語彙や表現を中心とした学習内容に偏りがちである。しかし、実際コースを取る目標を聞くと、会話力を伸ばしたいという学生が多い。つまり、教室での学習内容と学習者のニーズにずれが生じてしまっているのである。流暢さを伸ばしたいという要望が多くあるにも関わらず、自然な発話の練習が盛んに行えないというのが現状である。そこで、社会言語学の研究分野の一つであるストーリーテリング (以下 ST とする) を応用して短い会話練習を行った。

本研究における ST とは、自然な会話の流れで、過去の出来事や経験を話すという、いわゆる日常的な雑談のことを示す。学習者にとって、簡単な出来事であっても、その内容を順序立てて話すということが困難であり、これを繰り返し練習する必要がある。さらに、自然な ST を成立させる為には、聞き手側の役割も重要である。中上級レベルでは「読む」ことに焦点を当ててしまい、「聞く」という活動が疎かになってしまいがちであるが、この点も ST の聞き手役の練習を行うことにより、改善を図ることが出来る。

以上のことを踏まえ、秋学期に ST の導入授業を行い、テーマをもとに自分自身の経験を語る練習を数回行った。春学期には、ST の聞き取りを使用した気付きの促し、漫画を使用した出来事を語る練習などを通し、日常的な雑談力の上達を目指す。ST の応用は、言語学習の全てのレベルで可能であり、段階的、定期的に行えばより効果が期待できる。また、ST は真の対話を求める意識的な活動であり、これを通して学生間の心のつながりも深められることを示唆したい。

Megumu Tamura (University of Pennsylvania)

絵本の翻訳比較を通して日本語学習者のことばへの意識と解釈する力を促す試み(日本語)

言語教育におけるメタ言語能力の育成の重要性 (Berry 2009) が唱えられ始めて久しいが、メタ言語能力を養う効果の一つとして、学習者への言語の意識化につながる (大津 2006) ことが挙げられている。多言語を比較することで、その国の社会的、文化的な生活形態のあり方や背景を読み取ることが可能となり (古市と西崎 2009)、また、それぞれの言語に共通の規則性に気付き、普段使っている言語への意識も同時に高まることにつながる (赤松、他 2016) とされている。本試みでは、絵本のテキストに含まれる多様な言語表現が、その言語の母語話者の話し方、書き方のスタンスにも大きく影響を与えるような重要な言語データであり (成岡 2013)、メタ言語能力の育成に有効である点に着目し、日本語中級コースの一環として絵本を教材に使った実践を行った。翻訳の比較および絵本の翻訳を通じた言語教育の研究はなされているが、絵本の翻訳の比較を日本語学習の実践で行った報告は少ない。そこで本実践では、英語学習での先行研究 (柁木と久世 2014) を元に、*The Giving Tree* (Silverstein 1964) と二つの日本語訳の比較を通して、言語習得だけではなく、物語を多角的な視点から読み、翻訳の相違に与える文化的、社会的背景などについても探る場を提供した。また、絵本に含まれる「教え」や「気づき」を通して、学習者の解釈する力がどのように促されるかを考察した。本発表では、ことばへの意識と解釈する力を促すことを目的としたユニットで絵本を使用した実践内容、そのユニットで学習者が学んだことなどをもとに、本アプローチの効果と課題、そして教材としての絵本のさらなる可能性についても検討する。

Galina Vorobeva (Japanese Language Teachers Association of the Kyrgyz Republic)

常用漢字に含まれる画の計量的特質と経験的法則—Zipf の法則, Pareto の法則及び Menzerath-Altmann の法則を対象に—(日本語)

表音文字で示される言語では単語が最小意味的単位、文字が意味を表さない最小形態的単位である。それに対して日本語や中国語で使われる表語文字である漢字では最小意味的単位は構成要素（部首とそれに相当する要素）であり、最小形態的単位は漢字の画である。両タイプの言語の文章やコーパスにおける単語や文字の出現頻度や計量的特質の経験的法則への適合性に関する研究はすでにおこなわれてきたが、常用漢字に含まれる画の出現頻度の経験的法則への適合性に関する研究は見られない。

本研究では常用漢字に含まれる画の出現頻度などの特質を対象にした。画は一筆で書かれる漢字の最小形態的単位である。本発表では、先行研究としてまず英語における最小形態的単位のラテン文字の出現頻度の経験的法則への適合性について述べる。その後日本語を対象にし、常用漢字に含まれる漢字の画の出現頻度などの特質の経験的法則への適合性について検討する。

研究目的 常用漢字が含む画の出現頻度などの特質の経験的法則への適合性の確認

研究方法

- ①漢字の構成についての情報をデータベース化することを目指し、画の種類
の確定とコード化、それに基づく漢字の字体を表すコード化をした
- ②コードのデータベースを構築した
- ③コードのデータベースに基づき常用漢字に含まれる画の出現頻度などの特質
の計量的分析をした

研究の内容

- ①漢字の画の種類
の確定と記述
- ②漢字の画のコード化
- ③漢字字体の化、コードのデータベースの構築
- ④常用漢字に含まれる画の出現頻度などの特質の測定
- ⑤常用漢字に含まれる画の出現頻度などの特質の経験的法則である Zipf の法則、Pareto の法則、Menzerath-Altmann の法則への適合性の分析

Seiji Wakai (Károli Gáspár University of the Reformed Church)

日本人親から見た我が子の継承日本語教育の分岐点—複線径路・等至性モデリングによる分析より—(日本語)

継承日本語教育では、これまで日本語教育の専門家が家庭での日本語使用に関し親が持つべき態度や目標を示してきた。それは子どもを高度なバイリンガルとして成長させるための親の努力であったり、子どもの日本語能力がレベルと関係なく子を構成する重要な要素となっていることを意識・理解させようとするものであったりする。一方、親はこれら専門家が示す方向性は意識しつつも、自身を取り巻く文脈や自らの考えをよりどころに我が子の日本語に関する意思決定を行っている。従って、親自身の気づきや行動の変化に着目した研究も必要であると考えられる。

継承日本語教育に対する親の取り組みについては、子育てにおけるある時点での考えや行動をサンプルとする調査が行われてきた。一方、親が我が子の継承日本語教育とどう向き合ってきたのかを長期的な子育てライフの視点から捉えようとした研究は少ない。そこで、本発表では継承日本語教育に取り組む親へのサポートを検討するための一歩として、我が子の日本語（能力）をポジティブに捉えている親が継承日本語教育にどう向き合ってきたのかを複線径路・等至性モデリング（TEM）を用い分析する。TEM は研究対象となる現象に到達するまでの人生径路を非可逆的時間の中でモデル化する研究手続きである。TEM はナラティブ・データを用いることが多いが、本発表では *Journal for Children Crossing Borders* 第 12 号の論文に記された、日本人親による我が子の継承日本語教育についての語り
を分析対象とし、特に我が子に対する日本語教育の在り方の転換を迫られた経験と、そこでの意思決定にフォーカスを合わせ分析を行う。

Nobuko Wang (Senshu University)

初中級日本語学習者の音声を支援する教材作成—日本人大学生との協同活動と効果—(日本語)

日本語学習の音声教材の研究を数年来、続けており、ボイスサンプルと言われるボイスデモの活用や、プロのナレーターの録音素材を教材として開発してきたが、コロナ禍でのオンライン授業では、

学習者の自己紹介や面接でのやり取りの練習ができるよう、日本人大学生との協同で、録音を提供する教材作成を試み、クラスに取り入れた。本発表では、自己紹介の発話練習に焦点を当て、その準備と練習、そして学習者の振り返りを記録し、効果を明らかにする。

本教材は、発音・発話の練習だけではなく、書く・読む・話す・聞くという4技能を発動して日本語の発話を促進するアクティブラーニングである。まず、授業で学習者は、自己紹介の文を作成する。それを教師とともにチェックしながら完成させ、それを日本人の大学生が録音し、学習者の自己紹介練習に使える音声ファイルに仕上げる。学習者はそれを何度も聞きながら練習し、さらにそれを録音する。この活動は、授業内で文章を書かせ、課題として、日本人の録音を聞きながら練習し、録音し、その録音ファイルを提出し、クラスで発表会をおこなう。オンライン授業でも十分可能な活動である。この活動に必要なのは、日本語を母語とする学生の協力である。学習者の振り返りノートによると、「音声を聞くと簡単にまねできそうだったが、実際にやってみるとそう簡単ではなかった」など、自分で録音し、それを聞くという課題によって、新しい側面も経験できたようである。これによって効果が確認できたのは、適切な話速やポーズの挿入が学習できたということである。日本人学生が zoom に入り、学習者とのコミュニケーションも取ることができ、今後の発展も期待できる。

Nobuko Yanehashi (University of East Asia) & Shinya Yamamoto (Shunan University)

日本の地方在住外国人母親の「子どものことばと教育」に対する意識—intersectionality と母親のための学習支援—(日本語)

近年、日本国内では外国人住民の地方分散が進んでいる。本発表の目的は、日本の地方外国人散住地域に暮らす外国人母親たちが抱く、自身の子どものことばと教育に対する意識を明らかにし、そこに内在する危うさを交差性 (intersectionality) をキー概念に検討することである。さらに、これを母親個人の課題ではなく社会的課題と捉え、母親への日本語学習支援のあり方について提案を行う。研究方法として、外国人散住・中山間地域 X 市在住の外国人母親 4 名に対するインタビューを主データに、X 市関係諸機関・個人への聞き取り等を合わせ、質的内容分析を行った。その結果、母親たちの子どものことばと教育に対する問題把握・行動には個人によって異なりがある一方、共通した特性として、日本人／外国人という単純な二分法に依拠した事象把握傾向が見いだされた。この日本人／外国人という二分法的思考は、外国人母親、地域社会双方の意識と行動の根底にあり、子どもや外国人母親自身、さらに地域社会の持つ多様な属性の交差性を見逃し、子どものことば・教育の問題を外国人であることのみで帰属させることにつながっていた。本調査結果から、本発表では、日本人／外国人という二分法的思考が地域社会に暮らす母親本人とその子どもの可能性を制約する危険性—‘partial citizens’, ‘permanent minorities’であることを固定化する危険性を指摘する。そしてこれに対し、彼女たち・子どもたちが生きるまさにその地で、外国人住民、多様な地元の人々、さらに日本語教育人材が参画する、交差性の意識化を基盤とした日本語生涯学習の場を提案する。